

『教育の時代』新教育風土記12 富山県 一九六四年九月（東洋館出版社）

総合計画—未来をつくりうるか

矢口 新

富山の売薬精神

富山といえば薬うりとすぐ頭に浮かぶ。正式には配置売薬というのだそうである。売薬法の中にこのような方式を認めさせたのは何と言つても富山の薬業界の力である。

茨城県のある小さな町の校長が富山へ行つたついでに、有名な広貫堂を訪れたら、その町の担当の配置員がたまたま顔を出して、御本人の校長さんより町のことをよく知って居り、どこの誰さんは今どうしているかなどとたずねられ、話はずんだそうであるが、それにしても富山売薬の力をしみじみ感じさせられたと語っていた。私も子供の頃の経験があるが、なかなかしつこくどうしても薬をおいて行かなければやまずといった態度で、とうとう家へおいていったことをおぼえている。

この配置売薬のおこりについてはエピソードがある。江戸城で富山藩主がさる大名の急病を救ったのがもとで安全に行商することが許さ

れたというのであるが、この時の薬は反魂丹といわれる。このエピソードといい、名前といい、なかなか商売上手だという感じがするが、それにしては地道に売り歩くという努力型の商法が加わって、今日のような地歩をきずいたのであろう。現在年間の売りあげ額は数百億円位といわれているが、その販路は全国にわたり、ゆくゆくは東南アジア方面へ輸出も考えているという。東南アジア各地に配置員が活動する状態を考えると一寸微笑ましいが、果して成り立つかどうか。

それはともかく、この売薬は富山の県民の性格の一面をかなりよく物語っているといえるのである。地味ではあるが、進取の気性にとんでいること、一年という周期で回収する息の長さなどはある点では日本人ばなれているともいえるのではないか。単に行商というだけなら戦後の毒消しうりも有名であり、ある意味で一種の出かせぎであるが、富山売薬ははるかにねばっこいのである。



総合開発計画の基盤

実は私は富山県には十五年間もつきあつていて、年に数回は四五日から一週間位滞在する。そういう意味ではあまりに富山に近寄りすぎていて、風土記を書くに適さない人間でもあるようだ。これまで書かれたものをみてどうもそんな気がする。うっかり引き受けてしまつて、今になってしまったと思つて居る。しかしもう仕方がない、いまはそういう人間が書くのもまた一興であろうと思つて書いて居るが。

さてそれはともかく、私がこんなにしぼしば富山に行く理由は、一つは県の総合開発計画があるからなのである。あるいはそういうきっかけをつくつたのが総合開発であるといつてよい。総合開発といつても私はもちろんその中の教育計画についての手伝いを命ぜられたわけであるが、その第一次の発足は二十六年であつ

た。当時県の段階での総合開発計画というのはまだ珍しい方で、一体どうしたらよいか資料もあまりなく、いろいろ苦心したことをおぼえている。当時の高辻知事は、この計画の中心人物として山越道三氏（国会図書館専門調査員）をすえて、以来山越氏もずっとこの計画を見まもっている。（第一次計画は三十五年度で終わり、第二次計画として三十六年度からは富山県勢総合計画という十カ年計画がある。第一次計画は三十二年

度には修正されて最後の四カ年が修正四カ年計画といわれている。）この計画の立案実施の経過をずっと見ていて、私はいろいろのことを感ずる。まず第一になかなか新しいものについてのカンがよいこと。まだあまり他府県のとりかからないことにいちはやくとびついたということ

は北陸の一小県としては出来すぎていると思うのである。これはおとなりの石川県などと比べてみるとはつきりする。石川県にも能登という地域があつて、これは国の計画でも特別に開発しなければならぬ地域に指定されているが、しかし全体としてはおっとりかまえて、いかにも百万石のお殿様といった気配がみられる。富山はその点はなかなか抜け目なく、江戸城の中で反魂丹をうりこんだ殿様の商法の伝統を身につけていると思うのである。

新しいものに対する感覚のよさもあると思うが、これは県外薬うりの商法で、広く全国各地を見ていて、新知識を導入しているという長い歴史的な地盤があるのではないか。県民の性

格が売薬をつくり出したということもいえるかもしれないが、その売薬がまた県民の性格をつくつているともいえそうである。

ところで日本人は熱しやすく冷めやすいといわれる。私は富山でもしばしばこれを聞いた。富山県民は熱しやすく冷めやすいのです云々という言い方で何度も聞かされたが、私は、いやそういう所もあるかも知れないが、総合開発に対してはむしろその反対の県民性を表わしているように思われると返事をする。

これはお世辞でなくそういつてよいように思う。言い方は悪いが、一度喰いついたらなかなかはなれない薬うりの性格をもっていると思われる。それが極めてナチュラルだと思う。天性ともいうべきであろうか。

これに関連してもう一つの点は、案外に開放的な雰囲気の人をいれるということである。総合開発の中心人物山越氏などはそのよい例である。私などもその他国者の一人であるが、その辺の待遇の仕方もなかなかツボを心得ているのではないか。これもある点で薬うりのセンスのあらわれとも見られるのである。

米騒動の実行力—富山の女性

所で富山県で売薬の盛んな地方は、富山市から東の方である。主として呉東といわれる地域であるが、呉東の中では富山よりの方である。富山県には、富山、高岡という二つの都市があるが、富山から高岡へ行く国道をささげるもの

に呉羽山という小さな丘陵がある。これを境にして呉東、呉西というようにいうのは昔からである。今でもこの言葉はあらゆる場合に使われている。たとえば県知事の施策に、呉東に高等学校を一つつくれば、呉西にもそのバランスをとることを考えなければならぬといったぐあいである。ことごとくといっては少し大げさだが、この対抗意識は相当にあるのである。

こういうようになっていっているのは、やはり歴史的な伝統であろう。今はこんな丘陵なんかは問題でなく、国道があつたりとこれをオーバーしているけれども、昔はなかなか大きい境界線であつたと思われる。そこから必然的に文化、生活にも大きく影響したものがあつたといえよう。呉西はどちらかというと都会風であり、京風である。金沢文化により密接に結びついている。呉東はより素朴である。場合によっては粗野だといつてよい。東へ行けば行く程そうである。よく富山県では、下新川郡の人間は人がよく単純だなどといわれるが、その下新川郡は富山県の一ばん東のはしにある地域で、黒部川の流域に当たる地方である。おとなりの新潟とは親不知を間において境を接している地方である。

売薬の盛んな地方はこの下新川と富山市との中間にある中新川郡の地域である。この中間地帯が富山売薬の中心地というのとはなかなか興味あることである。ところがこの地域についてはもう一つ忘れてならない事がある。これは

あの有名な米騒動の発生地、滑川市がこの地域の中心地の一つであるということである。しかもこの米騒動の発生について忘れてならない事は、米騒動の口火を切ったのは滑川のおかみさん連中である。おかみさん連中が米よこせと地主の所へおしかけたことにはじまったといわれている。

富山の婦人は昔から働きものといわれている。隣の石川県では嫁をもらうなら富山からというふうである。このような働き者の富山の婦人でも、米騒動の中心地の婦人が米騒動の口火を切ったということに非常に興味をおぼえる。この土地の婦人は亭主が年中薬を売りに外へ出て家をあけている留守をまもっている。しつかり者の中でもしつかりものになるのではないか、そういう婦人なら米騒動ぐらいおこしかねないであろう。そういう実際的な行動力を婦人がもっていることも富山の特色の一つとして考えておいてよいことである。現にこの地方では米騒動は大正七年のものばかりでなく、それ以前にもしばしばあったのである。

そのことと、関係があるかは知らないが、私が見る所では富山には美人が少ないようである。とくに柳腰といわれる花柳界の美人は少ない。これは失礼に当たるかもしれないが、みなたくましいつらだましい(?)をしている。しかし極めて母性型である。もっともこの方面のことは見聞が少なく、自信はない。

北加積小学校

この滑川市といっても町村合併で市になって、それ以前は北加積村だったが、ここに北加積小学校がある。この小学校は知る人は知っている有名な社会科の研究校である。海後東大名誉教授がかつて、この名もなき一寒村で本格的な社会科の研究がおこなわれているといった所である。

この学校の研究のしづりがきわめてこの地域的人格を代表している。昭和二十五年頃から私はこの学校に行きはじめて、以来十数年引きつづいて研究にとりこんでいる。最近はずいぶんプロをあげつつある。この端緒をひらいた校長は荒館実氏であつて、今は上市中央小学校の校長としておさまっているが、校長になりたての頃は、大へんな苦労であつたらしい。この地域はなかなかうるさい所で、校長が気にいらないと追出してしまふということも聞いたこともある。しかし私の見る限りでは物わりのよい人たち、PTAの役員にいたように思われる。ともかく、そういううわさのあるのはやはりこの地域が単なる農村ではなく、薬業とも関係があるとみる。つまりある意味で開明されているのである。しかもなかなかしつこいという所、実行力もある所などが教育界に対する要求となつて出て来るからである。そういう所で北加積小学校のように十年一日のごとくやうて行く学

校が出たのもうなずけるような事がある。

新しいものと古いもの

米騒動を進歩的な思想の産物などと大げさにいうのは当たらないようである。そういう思想的なものより、もつと実際的なものである。思想という言葉を使うならば現実的、実際的思想とでもいふべきであろう。そういう点では人々の間にある意味の合理的な考え方も貫いているといえるかも知れない。だがそれ以上に、これが政治力をもつて発展するというのではないのである。つまり素朴な反発力にとどまっているのである。進歩的という点からみると、富山はむしろ保守的な県だといわれている。かつて朝日新聞の支局長だつた虫明氏に会つた折、氏に富山についての感想を聞いたことがある。氏は主として関西から中国地方の都市を歩いてきた人であるが、それらの都市と比べて富山は民衆がきわめて封建的だということを感じた。それは警官がいばつていふことによくあらわれている。夜一杯きげんで大きい声で歩いてた時、オイコラツとやられた。それでもいいきげんだつた氏は、「はい、あいすみませんとやつたら、それが警官のお気に召さぬ所だつたらしい。それはユーモアを解さない人間の態度だつたが、こういう点が富山の県民の特徴だといふのである。しかしそれにしても、総合開発などといふことをやうてのけて、ある意味ではきわめて新しい思想があるかのように

思えるがこれはどうしたことだろうか。どうも進歩的な指導者と封建的な民衆との組み合わせが極めてよくいつているのが富山の特色ではないかというようなことをいつておられた。私もこういう意見には多分に賛意を表したいような気がする。

富山は県民性としてはおとなりの長野県とはちがつてどちらかという思想的、観念的なものには興味を示さないようである。はるかに実際のなのではないか。ある意味でリアリズムに近いといえよう。しかし近代的リアリズムという点では必ずしもそうでない。もっと素朴である。現代は素朴なものと、進歩的な思想とが往々まちがえやすい時代であるようだ。

富山で一ばん教組の勢力の強い所は下新川郡である。さきにも述べたように県では最も素朴な、人のいい人間が多いといわれる所で教組が最も活発なのである。しかし県の教育委員会としてみれば、やはり頭の痛い地域なのである。同時に教育的活動というか、あるいは教師の研究活動という点でも最も低調だといわれている。私は長年見ておつて、やはりそうだという気がする。教師の中でも最もかわいらしい人が多いのである。単純、素朴な人、素朴なるが故にくよくよし、くよくよするが故に反抗する人などが多いようである。そういう地域が、富山の最も僻すうの地で、最も主流からはなれた勢力として存在しているというのは考えてみるとなかなか面白いことである。

そういうところへ富山県の施策が行きわたるには、県の教育当局自体にも今一步あかぬけたものが出来来ないといけないのではないか。

呉西と呉東—文化的伝統

これまで呉東の地域、つまり東半分のことについて語りすぎたようである。もう一面の富山を語る必要があるであろう。はじめ私が富山に行きはじめて頃、呉西の方は一つの特徴をもつていて、どちらかといえば保守的である。呉東の地域のように簡単には動かないのではないかとということも多くの人々から聞かされた。つまり総合開発というようなことでも人々はなかなかのつて来ないのではないかということになっていたのである。これを裏からいうと、呉東の人より単純だから、県がやるとなると、素直についてくるのだというようにもとれる。確かに一面を物語っているようである。しかし私は今はそう簡単にはいい切れないと思うようになってる。

確かに、はじめにいったように、呉西の方がより金沢に近かったという点、より都会風であったという点、より京都風の文化をもつていたという点は認められるようである。その点は何物についても考えられる。呉東よりも呉西の方に有名な人物が多い。指導者にも呉西の人が多いようである。それは呉西の文化的伝統をあらわすのかも知れない。

高岡市へ行くと、正力読売新聞社の北陸本社

の社屋がそびえている。正力氏はこの土地の産であり、郷土愛からこの高岡に本社を建てたものである。富山市でなく高岡市であるという所に、正力氏やそれをめぐる人々の考え方があらわれている。高岡はそれだけ自尊心をもっていてもいえるのである。これは呉西の呉東に対する自信といつてもよいかも知れない。そういえば正力氏の処世のあり方もどこか富山の実際のねばっこいところを代表しているようである。現知事も呉西の人であるが、例の中共へ高齢をおして出かけて、貿易の話をまとめてきた松村謙三氏も礪波の福光町の産である。これらの人々にはどこかシンの強い、ある意味のバックボーンがある。こういう人々が多く呉西の人々の自信をつくっているであろう。それが旧藩時代からの、文化の伝統とつながりがないとはいえないようである。呉西の人々のそういう自信は、教育の領域でもやはり動いていてと見なくてはなるまい。軽々に動かないというのはそういうことであろう。

呉西の文化を語るとすぐ出て来るのは、高岡駅前銅像のある大伴家持である。彼は天東十八年から五年間越中の国守として在任した。そのせいもあつて、万葉には越中の歌はなかなか多いようである。この辺はそういう所から考えてもかなり古くから文化との結びつきをもつていた所である。

がなんといつてもこの越中が最も大きい影響を受けたのは、一向宗ではなかったか。およ

そ日本の歴史の中で、民衆の中に思想が入ったのは何といつても鎌倉以降の新興仏教がひろがった時である。このような大きな思想の動きはその後といえども見られないといつてよいかも知れない。その最も強い影響をうけたのが、この越中の国であり、いまだに、越中と真宗との結びつきは極めてつよいのである。明治の廃仏毀釈をへて、百年間に、仏教はその姿をかえつつあるが、この富山の地方は、そういうなかでは、頑強に真宗を守りつづけている土地だといつてもよい。これもまた注目してよいことの一つである。

しかし私が教育界と接触して感じたところではその影響がとくに強くどこかにあらわれているといったことがないようである。一般に先生方に聞いても、仏教は老人のものだというように割り切っている。よく進歩的教育者のいる地方へ行くと、父兄の封建性とたたかうのが大仕事だなどということを知り、富山ではそういうことは耳にしない。どちらかというと円満にやっていると聞いた感じである。そこらにも、富山らしいところがあるといえるかも知れない。口の悪いのにいわせると、そこらが富山県の保守性だというのだろうが、そういう言い方はおかしいのであろう。

勇氣ある実験—産業教育館、産業高校

富山の教育の現在を語るにはやはり総合開発を語る必要があると思う。私は関係者でもあ

るのでよく知っているが教育の総合計画がそれ程すぐれたものだとも思わないし、富山の教育がその計画にしたがって、着々と積みあげられていくとも思わない。むしろもっと計画的にもっと合理的に運営したらよいと思うのに、総合計画の理念とは反対の方向へ動いている場合も多いのでどういふわけだろうかと思うこともある。教育当局も、もっとよく総合開発的
理念を勉強したらよいだろうに思うこともある。それでもよその県にある計画とちがう性格は多少もっているという点で、富山の教育を語るには忘れてはいけないようである。

日本人は教育によらず物事を計画的に積み上げる点では、もつとも不得手な国民だといえるのである。これは歴史的なことも関係があるのではないかと思われるが、明治以降何によらず外国の模倣によってやって来た。自分で計画した、じっくり時間をかけてつくりあげるといふようなことはしたことがない。さるまねなどといわれるが、どこかでよいことをやっているのを見ると、あつというまに恰好をつける。そういうところは天才的である。それで一世紀もやってきたので、自分でヴィジョンを描いて、それをじっくり計画的に実現するなどということはどうもできなくなっているといつてもよいのではないか。

そういう点では、富山の総合計画には一つの特徴がある。十三年前にたてられた第一次の計画の中で、産業教育のサービスセンターの計画

があつた。これが現在産業教育館として、さまざまな働きをしているのであるが、これなどは、当時としてはやはり異様なものであつた。事実具体的に実現にうつすにはさまざまな問題があつたが、それをのりこえて今日に至つたのである。それも決して順調ではなかつた。初期の二十八年だつたか朝日新聞社から関口泰氏が富山の新教育風土記を書きに行ったときは、まだ海のものとも山のものともわからないもので関口氏などは否定的な意見だつた。そのことは朝日から出版された新教育風土記にもつている。それをとにかくものにして来たのはやはり富山のねばつこい県民性によるものだといつてよいであらう。

このことについては、もう一つ忘れてならないことは当時の教育長近藤鋭一氏の先見の明であらう。この人は富山県人ではなく、確か愛知県人であつたと思うが、案外この人がいなかったら、こういつた新しいものは生まれなかつたかも知れないと思う。こういう点は今後大いに考えてみなくてはいけない点であらう。今でこそセンター方式は当たり前のようになっているが、当時思い切つて開発するには大いなる勇氣がいつた。計画をただの机上プランにしてしまう可能性もなかつたわけではないのである。よその県ではそういうのが多かつたのである。そこを一步ふみ出してわからぬながらこねまわし、こねまわしてつくりあげたのである。計画的な実施とは実はそういうものである。

そういうことはどちらかという得意な県民であるから、ここまでやってきたのではないだろうか。

これと似たようなことに産業高校というのがある。農業と工業の二つがあるが、これは農業の方は教師の巡回方式を加味した新しい定時制高校である。また家庭の農作業を現場の学習として重くみる点も新しい企画である。さらに二年間は二十四時間体制をとる経営伝習農場の後身としての農業経営科という形態もある。工業の方は高岡に設けられているが、これは教育委員会と企業の連合体との結びつきで実施にうつされた。週一回は昼間登校させる点、教師が巡回してゆく点、工場現場の作業を教育として編成しようとしている点など新しい試みをもっている。これらはやってみると問題山積であつて、相当の時日をかけなければ物にならぬものであることは益々はつきりして来た。こういう縁の下の力もちの仕事をやるところはまさに富山県らしいと私は思っている。しかしそれも産業教育サービスセンターからはじまった積みあげが可能にしているのであつて、結局じつくりやつたものにはかなわない。

最近後期中等教育の問題がやかましくなるにつれて、産業高校方式は注目されはじめているが、その形よりも、この営みを通じて、後期中等教育によこたわる様々な問題を明らかにしている点が大いだと思う。恐らく県自体もこの学校の運営を通じて勉強している所がある

と思うが、そういうことが表に出て来るともう一步前進するであろう。今はまだそこまではいっていない。しかし最近福光という小さな町で、この方式による工業商業を合わせた定時制高校を設ける要望がよく、町をあげてこれを育てようとしている。そういうものがどういう波紋をえがいていくのかは興味あることである。

最も大きな壁

日本の戦後の教育の大きなマイナスは、レーマン・コントロールの弊害ということである。日本のような上下の関係の強い、従つて権力に対して弱い社会では上にレーマンひらたくいえば素人がすわることによつて、教育全体の動きが散漫になつてしまふ。レーマンはレーマンらしく分を心得た発言をしておればよいのだが、とかくそれを忘れるのである。国といわず県といわずこれは相当大きいマイナスであつたように思う。ここ十年間位の間に世界が大きな教育改革を行なつてゐる。制度といわず、教育の課程といわず、方法論にしてもまるでかわつて来た。これらは何れもスペシャリストの貢献が大きかつたのであるが、日本には、そういうスペシャリストを尊重し、正しく位置づけるという雰囲気がない。素人がすぐいばるのである。従つて現在世界の進運から十年以上のおくれが見られるというような事態に立ちいたつてしまつたのもやむを得ないといわなければならぬ。

こんなことをいうのは、ここ十年來富山の教育を見ていて、戦後の教育施策のすぐれたものがなしくずしに姿を消して行つたのはやはり素人教育論の横行だと思ふからである。また総合教育計画の実施についても、それを困難ならしめているのは素人たちである。教育委員会が陳情処理委員会になつたり、議会の各地域、各団体の利益代表からの攻撃をさけるのに必死になつたり、とにかくよくない習慣ができてしまつた。これは富山に限つたことではなく、その点では、総合計画という錦の御旗があるだけ富山はまだましな方である。

しかしこれ迄はまだよかつたと思ふ。問題はこれからである。この点については、総合計画を進めて行く上に、最も大きな課題とならう。これ迄のところ総合計画が進められるに力があつたのは、やはり比較的若い層に優秀なスタッフが居たからであつたと思ふ。ところがこの人々の苦心の割には、実りが少ないという感じがするとところに問題がある。これはスタッフの力の指導をはかるという点の自覚が不足しているからではないか。日本には、スタッフとラインの区別がはつきりしていない。科学的な調査、研究、企画にもとづいて政策を樹立するということに対する合理的な考え方は、富山の場合でも決して十分とはいえない。ここに根本的な課題があるといわなくてはならぬ。

富山の教育施策には各種のセンターを設けて、教育現場にサービスするという特色がある

が、これはかなりスタッフ的な役割をもっているにもかかわらず、あいまいな位置づけである。またそういうものの出現とともに、教育研究所のあり方も問題となつて来よう。このための研究所は、第一次の総合開発時代には大きな役割を果たした歴史をもっているが、最近はその機能を十分果たし得なくなっているようである。現場の声を聞いてみても相当に不満が多い。

がそれは個々の事柄に対しての対症療法的な対策では解決することでない。やはりスタッフを育てるといふ考え方が必要なのである。これから十年は恐らくこれまでの何倍かのスピードで変革を遂げなくてはなるまい。教育に対して、そのヴィジョンを描き、アイディアを出し、計画するスタッフを組織としてどう位置づけるか、これが最大の課題であるのではないだろうか。それが総合計画の必然の方向である。

小教研の組織—小さなまとまり

富山の県民は教育に対しても不思議なカンをもっている。新制中学校が成立したとき、富山では町村組合立の中学校が多くできた。小さな中学校をつくっても仕方がないというわけである。それがそれからしばらくして、町村合併の声が起ったとき、カンのよさとなったわけである。これはただカンのよさの問題だけではないものがあるのではないだろうか。それが何であるかは私にもよくわからない。ただ一般大衆が教育に対してなかなか熱心であること

は確かである。次の時代というか、子孫の時代を考えるとということについては、あるいは仏教的な考え方が働いているかも知れない。日本人の性質からすると町村間の協力ということはなかなかむずかしいのであるが、うまくまとまるのである。

このまとまる力を教育界が発揮したのが、いわゆる小教研、中教研の組織である。正式には小学校教育研究会、中学校教育研究会というのである。富山では区域とよんでいるが、郡をいくつかに分けたような範囲の地域毎に研究組織をもち、その連合体としてこの小教研、中教研を設けている。これは戦後の荒廃の中から立ち上がるうとして先覚者たちによつて開発されたものであるが、これはやはり上からの組織でなく、下からのものという雰囲気がある。更にそれは十数年の時間の中でも育てられて来ている。これが富山の全般的水準を高めていることは疑いない事実のようである。

勿論こういふことには地の利もある。富山は小さい県で、一時間も自動車で行れば県内たいていの所へは行つてしまう。こういうことがまとまりをよくしている条件であろう。まとまりがよいからコミュニケーションもうまく行く。ある意味で富山県全県が一つの町である。最近問題になつてくる学力調査で富山は比較的成績のよい県だそうだが、そういうことは地の利と関係があると私は思っている。それに小教研的組織による研究の継続があつたということ

であろう。つまり人の和であろうか。富山の人があまり学力調査とさわがないのも、その辺に自信があるからかも知れない。

富山の誇り立山—新しいヴィジョンへ

以上富山県について思いつくままに書いて来たがまとまらない中に紙数がきれた。最後に思いついたことは、富山県民の誇りの一つである立山にふれないと叱られそうだということである。確かに立山連峰は美しい姿を年中みせてくれる。正直のところ自然の条件としてそれ以外に富山に見るべきものがないといつてよい。夏は暑く、冬は雪でしかも長く、秋も短かくといった具合で、立山が唯一の救いである。そのせいでもあるまいが、富山県の学校では大い子供を立山登山につれて行くようである。これは人間にかなり大きい影響を与えているのではないか。登山はよく人生の道にたとえられる。もし登山によつて教えられているとしたら立山の恩恵は大きいものである。

私も立山へ一、二度登つたが、上へあがつてみると、富山県は山すそのほんの一部を占めていることがわかった。富山県に立山があるのでなく、立山の一部が富山だった。そこでやはり感ずるものがあつた。私は富山県民が狭い富山の中でのみ考えることなく、広い地盤に富山をおいて考えてみるということをやつてほしいと思つた。

(国立教育研究所員)